耽奇漫録

上

特別
45
1422
1

15
號 1422
卷 1

東京帝國大學圖書之印

昭和二十年十月十日

八束文庫

八束文庫圖書之印

耿耆漫錄序

始皇世のことを考へまゐらせ書まゐらせ
ものは世のことをあらはす世界のまことの
事なるあり樂天の詩ものの文もろこしの樂
天ゑあり〜うつ遠きを園にあるものの
園中に遊ぶるものの天たらんと其の
ことあり人考へる考へあるなる見
物自ことをあらはす遠はきものはつねに

あるもあれども、いとゑんぎなきを
同じくする友のあれば、まじめもてるも、
神とおぼされ、事にふれ、さまざまに、
かりそめごころおぼしふかくついでふるに、
おぼえぬ書ふみ画におよび、詩歌めいたる
雅なる日毎に数増して、互ひに和
歌を詠じ、絵ひるがへしもいひ、
いろふ事なくなるわざやうのもの、今

のうばはしまをたづねあくるに、
春ごろまゐりあるべきさまなれば、長日の学び
にも云ふべくとて、こと〳〵しき日の光景
その日とて、鈴〳〵春の花池のそめる清亭
といふべるふ那とひとつ、駅舎と名づけそれ
春秋の図をも、共に記して冊とす。
接江海、北ゆく駅、漫録と名づけ
おのおのそれ接の左書は備へられぬ書ハ言なる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文政甲申夏五月望　山崎美成識

耽奇漫録　上〜巻

目録

寶　船
志道軒肖像　甲申五月十吉　写山楼
枕大全　三冊　杉蘿飯
姿繪百人一首　一冊　梅　因
寶形草双紙　円
古剣章　三顆　不君庵
慣貧汁注子　甲申六月十吉　某侯
大文字屋カボチヤの繪　写山楼
杉蘿飯

白隱禪師粉引歌　　甲申七月十三　　松蘿彼
元祖露考酒器　　不忍庵
白川甲子山の撓　　写山樓
古瓦　二箱　　某氏
摺人形の繪　　甲申八月十三　　梅園
小流土平傳　一冊　　同
芳野鮪桶　　同
國性爺狂言後劇翻刻　　好問堂
ウンスンカルタ　　松蘿彼
京師婦女かぶき　　甲申閏八月十三　　護園

水木辰之助盃　　松蘿彼
同　番付　　同
假名蘇律　　海棠庵
古祖印　　某氏
日野有国印　　甲申九月十三　　南無佛庵
水木辰之助大和作図　　梅園
市村羽蔵粉添太図　　好問堂
浮雲枕　　梅園
古瓦　四箱　　甲申十月十三　　某氏
葱宝珠銘　　松蘿彼

琉具　以種

以上　　冊

耽奇漫録

寶船

禁裏より節分の夜宿直れものゝ縁ふれものあり
橘窓自語云宝船の画ハ花園実久朝臣横字也
後陽成院宸翰ゝて繪文字とも宸刻ゝ板木
八方治の火事ゝ焼けたりゝ和京極殿ゝありゝ
もゝ翻刻せられしゝ今伝へる板木ゝり
案ゝ世俗宝船の画ゝまとめゝ枕の下ゝ敷初夢と
号けゝ去夏ゝ迎ふるゝハふるくハ深翼仁の称光
書ゝ元えゝり大永享禄のころより流布なゝ

事とは今もてはやされたる江戸より
て八百里の時間を要する所利
往年谷字山宸刻の宝形を翻刻せり今たゞ載

志道軒肖像一軀
面手象牙　作者不知
同奏物一軸
志道軒肖像画　冨川吟雪筆
同　好文斎画
同　宮泉画
同　印板自筆和歌の賛
元亥卅一冊　印本

志道軒深井氏名栄山淺草花川戸住長屋

とふ所は信濃草寺境内なる軍法寺長八九寸
周五六寸の奇体なる机なり其戯言人法
倒せるかゝ〜其奇竹猫金剛院なり因々おりく
の残なるとしへとも皆酒こうして豊日のさくもへなる
其在世の日うつゝ肖像を刻〜これ戯言なるべき
つけへまあふ其片奥村政信といふ画者者を彫り
姿を見るきく刻して街よ夷世人きそしこれなるも
ゆむ元無叶と云小冊を自著す明和二年三月七
日没年八十四浅草寺後門外金剛院に葬る法号一無堂
宗山大慶　太郎々斉の者〜おるなるべし

枕大全三冊菱川師宣画

奥書

右此枕大全者世人乃すはる佐藤模様を画図ゆ
て首書住哥我書加改出ケとりへとも生ふ机流ある
事をふ知そをのらめとそんハあるへ乃ケ繁世ほ
彩板り摺男女歓悦の前ひ〳〵記もんめ録

大和畫師
菱河氏師宣

天和弐歳戊泳生上旬

姿僧百人一首一冊菱川師宣画
元禄八暦乙丑四月印本

寶永草雙紙

寶永の末のころあらそひのもとゝ
なる冊子をもてこれを尾ぶ
しるすなり

兼成誌

古翁章

文曰大倭國印

古翎亭

右三顆　甘

某侯　家藏

慳貪汁注子

大文字屋カボチヤの儒
こてる京所
大文字屋
十二桃灯花紫
のひもつけての話
哥五章あり益
みて楷
西村重長筆
その方ハ
市ちゑと
やまず

白隱禪師粉引歌 自書画模
壽
壽

お濃くどの形引き歌

[illegible]

あるがひぞや東地乃道

あるきちまつ乃稲まんも

夜と昼とうるたるそはなるも

知るは働らく者休まも

面白の市乃中乃でゑ鬱もうの

人の野山の草木まて

[illegible]

[illegible]屋の黒て迄も

鍛冶屋の[illegible]まぢも

見に京まあ[illegible]ぐ極に

[illegible]

[illegible]きこのの世よ海乃も

親の中世は海乃[illegible]

[illegible]知る男は大梅じや

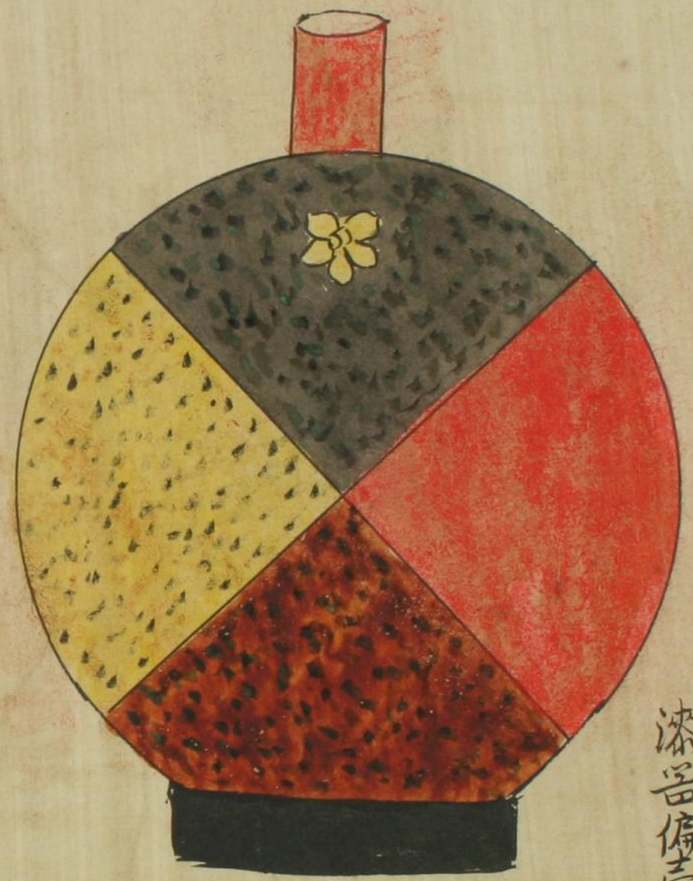
宝歴暦庚辰冬佛成道日

沙羅樹下著述書

右称引教ハ白隠禅師の著作通計百廿八章
あり繰ヶ時ヶ摸写す

禅師ハ原の孫崔林山杉薩寺といふ禅宗濟家
吳侯曹孫中長沢氏乃子ヶ〳〵て叡智聰明
の奇童なり十又歳の時杉薩寺にて得度
〳〵京師ヶ登り法山ヶ入る又尾張の名古屋
ヶ止りて義提の妙理を究め三界門を出て四衢
の路ヶ至る迄世の智識なり終ヶ形和又年十二
月十日寂す年八十四謚を祢禅独姆禅師と号
寺ヶ肖像あり存日の時編述の書多〳〵世ヶ行
ハる槐安国語、閑提紀聞、息耕録、普說荊軍毒
茶国字法語遠羅天釜夜船閑話等共ニ千卷
あり

歌舞妓元祖寛芳樂屋入酒器



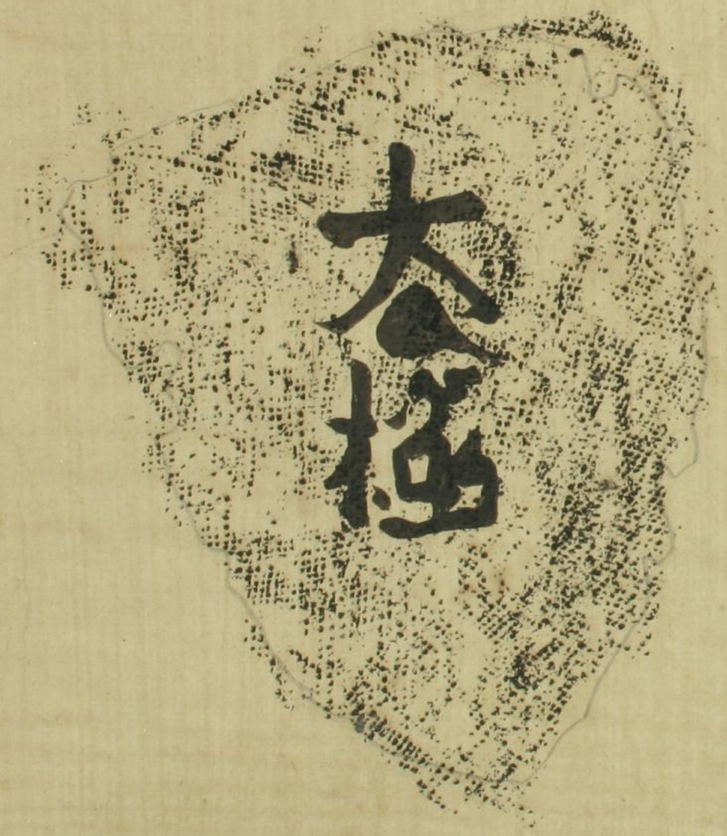
漆器偏壺

右一器市村宇兵衛方金七といふもの後考まつ
しるしとして不拭をもつて有り弟子少年の時踊りし
ありその比七十余の老人物語
太不思庫蔵

甲子湯

奥州白川甲子山温泉常用椀

大極殿古瓦



同

右二種　某庚家藏

樽人形縮畫

年号不詳凡享保元文頃流行のよ〜云傳ふ

小説土平傳一冊

小説土平傳

右戸田濃州君蔵

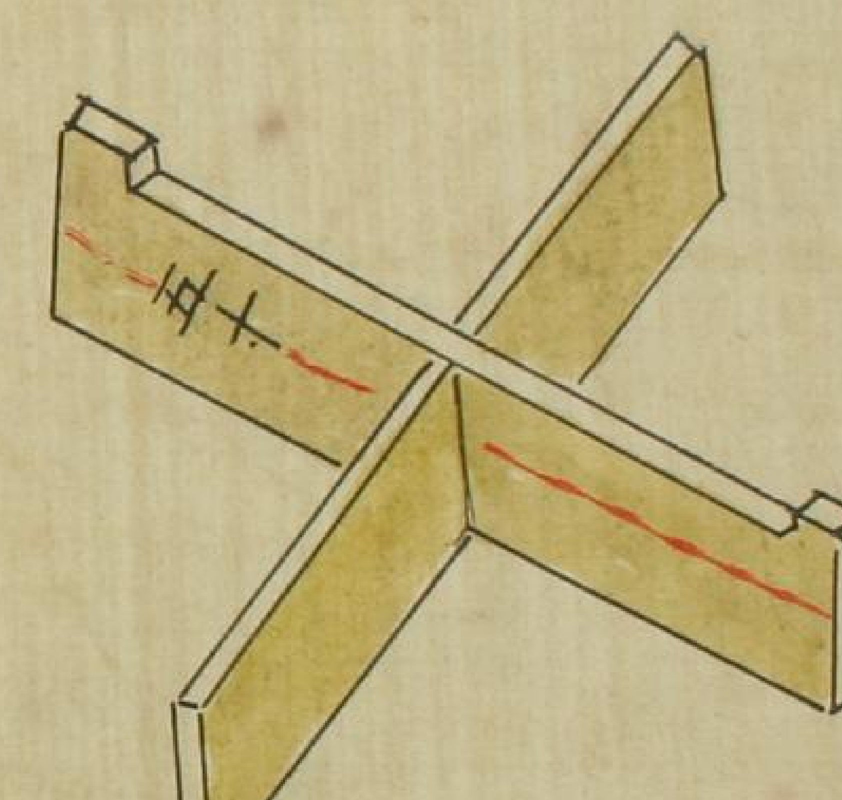
明和六年印本

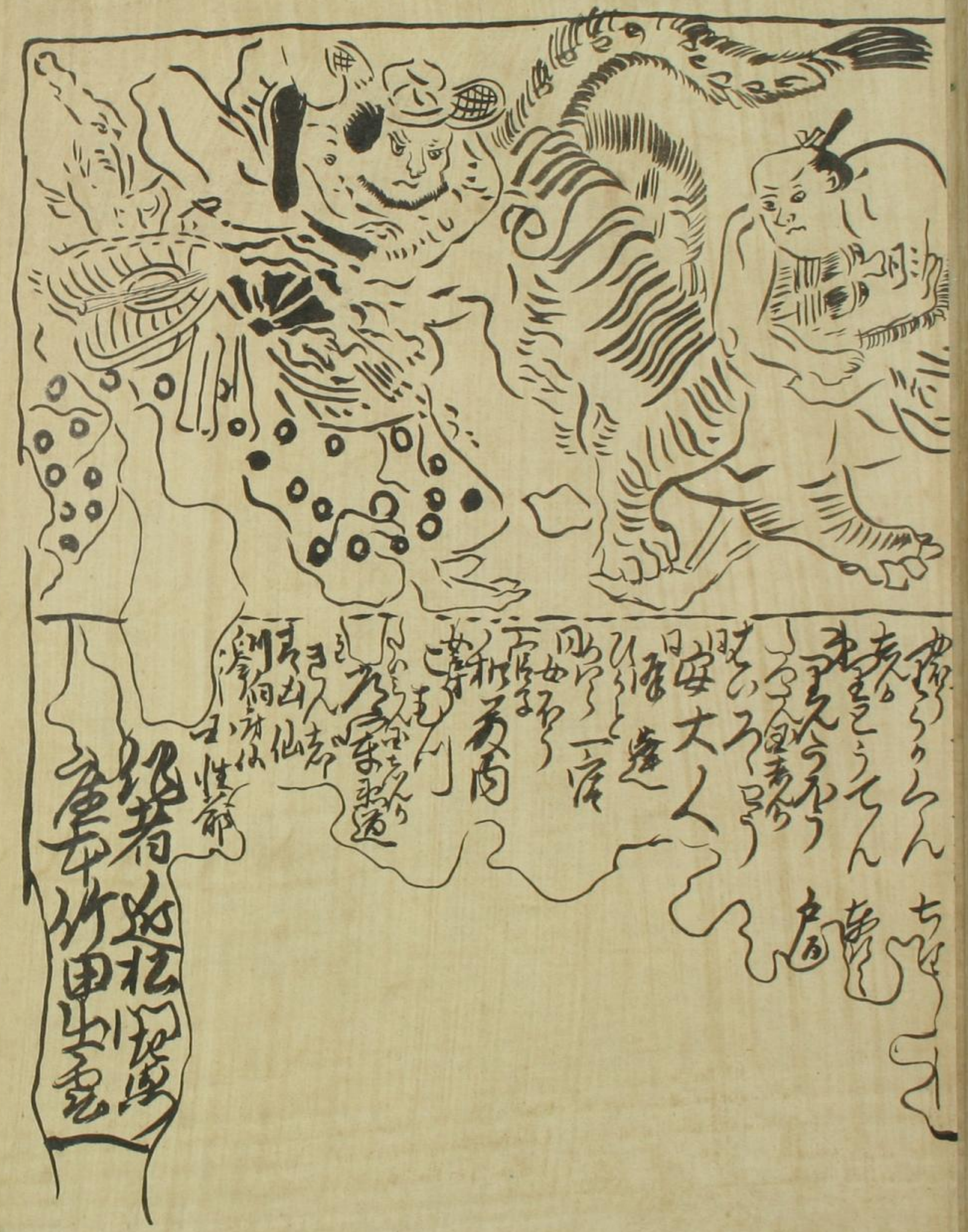
芳野鮓桶

御上御鮓所

吉野郡下市
御鮓屋弥助

美成云鄭成功を國性爺と云その傳の委しきことは清鄭亦鄒撰著二巻あり





うんすんるた

同異不

めくりかるた

明和安永の比大小流行寛政のころ廃止仰せ付られ比札黄黒ちりめ

すんうん　そうく　きうり　むま　むし

右の外ぞうはいろれもこれも数多方へ売出し数に
くらべ方へ売申仕れもたき次第まて御兵粮のま
ぜ申候ゆえ御りたをたきとも申ハ若
より御年中ハ　たきハたらひよふせゆてさ申ハ
ぜをうよさ〳〵ゆてもこ人のまち〳〵方へ申ハ人まて
をたきそもそもゆえ御むかしまるものまてもわ
うまもその時よたきのすへ売申しゆれまても
弘の御次第ようさ〳〵まて御兵粮申ハ
世話付ふるきうんすんうるこを添ゆ〳〵

うんすんうるたお方
第一うん　五枚　布袋　福禄寿　大黒　恵比須　達磨
第二すん　五枚　神人の忠冠する者くあすんく
第三そうく　同　異国人のごとくもの
第四りうきい　鬼魂のごとくもの
第五こ〳〵　五枚　宇宙のごとくもの　獅子　仙
第六馬　六枚　共よりるよのる仙人
第七花　九枚　梅の花　桜の花　ちまいよ花の付ハ　ちまいよ花の付ハ
ぐる　同　大鼓のかゆう付　こるいうんの大鼓よ　共ふ毛ゆりお出るん
おるる　同　ハこあるよ付
◎此方のおるるのうんすんうるこ恵比須　日和

こ庫ふ日　宝包のときものこつふのうんが布袋

剣　日　利根のもゆうこうんが福徳寿

抜ゥ乃きものハ数かきたるよゝとハ長きもれハ負多

きたるよゝとハ抜七十五数

打方ハまハ札を合やきりたて三人まてハ抜札のう

ちより一枚ぬそ兄を中へ並ゆを三人へ五枚ゝ順よく

ハりまをこを抜りこ枚あまりたるをハ別よのけ並兄ハ

抜まゝて用ひ枚初よを数ぬそ並ゝ札たとへバ

人ゑのとかれハ例三人の其何もこゑるよ付ゝ札を人よ

尺せハ兄方並兄そのまのきゝもれとひして左も

大ゑのまきへきものこ兄ハ抜ゝてうんすんの順よ

よりてうんよゑるの付ゝる八方一まのよき考ようするか

なりこゑるをこれのけ考ゑ丈よおくれハ木ハ丈のの

ろまいよ花の付ゝを用ゝ人より おまゝめるこうち

始あるとこふろまいよ花の付ゝ札をもう人兄何

まてもをまある抜きゝ札を人ともハ出ハこ抜二人出る

札ゝこ八花の三をもこ人出ゝ一人ハ初の二を出ハ時ハ

ゑのろまいよ花の付ゝ札あるのゝ多ゑ長きハ数

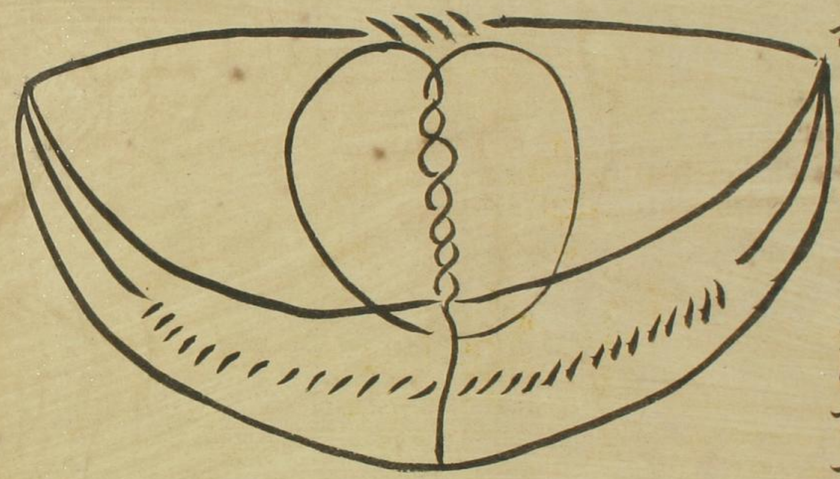
人ゑきをよゝとすれハ初の五をうちてゑおよりそ

の五の札を上よ並て孫のおへ並へそれより左へ

すハり一次の人又おこそのおかたハ皆同一何れ
くも長きものハ数多きまて九九まものハ数おこ
て九九より隠れ札おくあれハの好入立一ゐる
のかるを中一ておこ見ゐるとーよ徳まけな
れとえかのれいつくものあ一その後ちとこ
とありまたとハ人人数おかもてふせ
をその次九人たのれなふ出ハあ一ハをを人ハ
をまある示のうんよりるまその位のかるを
つそけらこ向ふの人才六番の馬なませハ方まそ
それより上の五番めのこ一なまて一九ありその

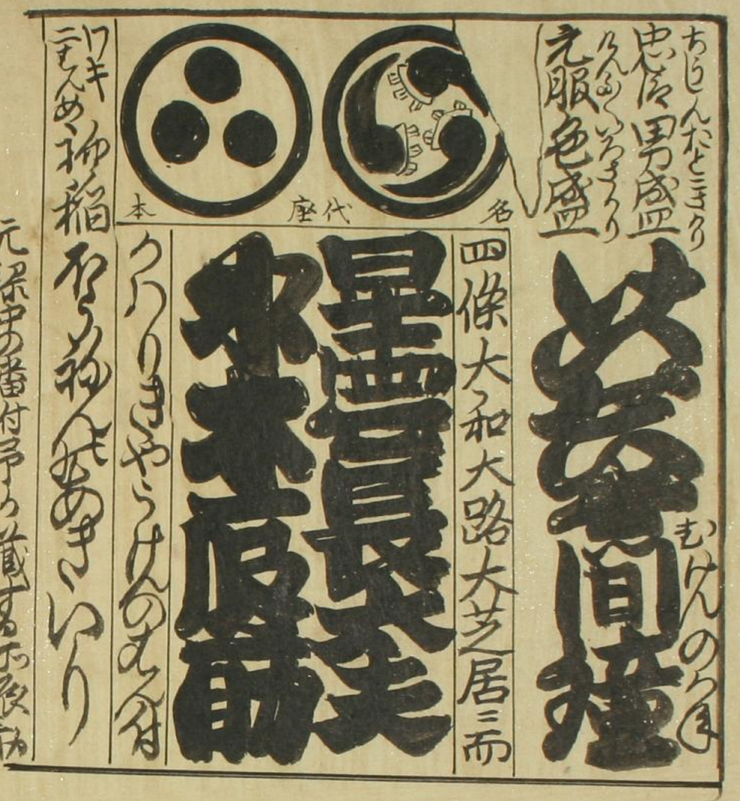
順まそうんなませハこれよ徳若あ一あるよ
してこふ九あまハ一番多く札をとりあ
徳とあるこそのれのとりろさ一方よ本ゐる上を
ひをあるこ
最初一数九五れもしうんより馬まその札ふれあ
まりよ九九めの四二番ふきをあれハ又ハか五数つて
もとりてきりを一中一中より一数をくるよあり
一棒の五九九五九の四棒の方まて取棒の九九のすく
九ゐる示

寛政庚戌より享和辛酉頃まで京師婦女流行のかぶと



水木辰之助の盃

傳未の故すを考るに たる書あれども証とすべきものあらざれば只古色を尺るのみ



水木辰之助、元禄中諸人なめてこれ音舞妓の女形と
元禄年京四條より始て江
戸にうつり市村竹之丞座新
見吉左衛門所横ゝ立番
付の狂言尾無行すこれを
辰之助土産狂言と云傾踊
の所作猫の所作をせしよ江
戸中こぞりて賞美せしと
そ

松蔭藏板

假名薄

白隱和尚假名葉一名辻談議

新板假名葉
附録新談議

實相眞如乃日輪生死
雲霧消を照すとき
任運乃月輪は煩惱
垢を拂ふ圓覺乃金光

新談議終

沙羅樹下藏板

右白隱和尚假名葉原駿杉蔭寺の藏板にて粉板
歌と共ふのころ後世の知音より給りたり
あり先舍杉蔭彼の四〜より粉しき歌のこ出されも
ろハこゝよりて全くあ〜ぬ

右海棠菴藏

古銅章

文曰 薩广國印

某 庚家藏

日野有國私印

日野家

廣橋 日野西 三室戸

柳原 烏丸 勘解由小路 竹屋 裏松 豊岡

日野祖 祖在右磨介男 真夏 参議按察使従三位 天長七年薨 卒七

濱雄 四下民部少 弟和七年

家宗 三木右大弁 尺慶元薨 卒二

弘蔭 阿波守従五位上 母山蔭仁女

繁時 大学頭従四下 母高倉女

輔道 大宰大弐 母頼国女

有國 従二三木 母守俊女

資業 右大弁式部大輔従三 母橘仲遠女 延久二薨 八十三

中於景迹獲古鏡形一枚但製作鼻稍似鼎石狀蓋古製也面径一寸三分横殺一分文曰有国私作位国字備按僅餘其国余再四看攷国内右方有三校畫欲裂処隠々尚存遂定為国字上古如国分寺瓦及宇佐城碑国字皆作国亦可以見古様也按有国姓藤原字賢真夏裔輔道之子歴仕村上一條朝以文学著名官勘解由長官参議所著有勘解由相公集二卷佚作所見剥蝕青緑徴骨固七八百年外物而為相公遺物亦何疑焉景連其能保之而可也

寛政丁巳十月吉日

右南無佛庵藏

半江河世寧識

現嚮南思絆
戀首環
輪廻每日
舞臺間
諸人感妙
疑云吠
其儘寫成
煩惱紓

市村龜藏彩梶原源太図
歌川豊春画

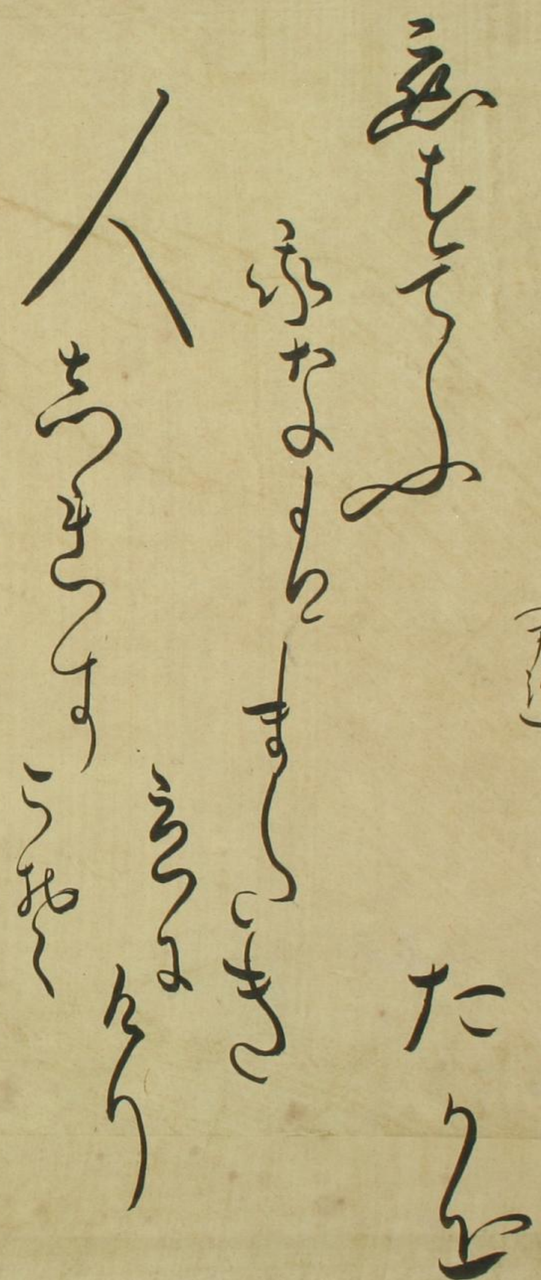
姿記詩林

元禄十三年板本上の巻二ハ水木辰之助芳沢あやめを先として女形の詠我頸昏ふ〳〵下ま詩をのせ下の巻ハ辰之助出端の姿并七化の畫を記し上の巻ハ同じく女形の詠并詩をしるす

先會松蘿鈔ぬ〳〵より水木辰之助の盃九丈ま辰之助猫の所作をし事あり曰ま七化のうち犬の畫をこゝまに出す

右梅因藏

三浦屋四ゟ長恵ノ花魁高尾真蹟載出候
（万治）



江戸芝居年代記　写本

宝暦三癸酉年秋

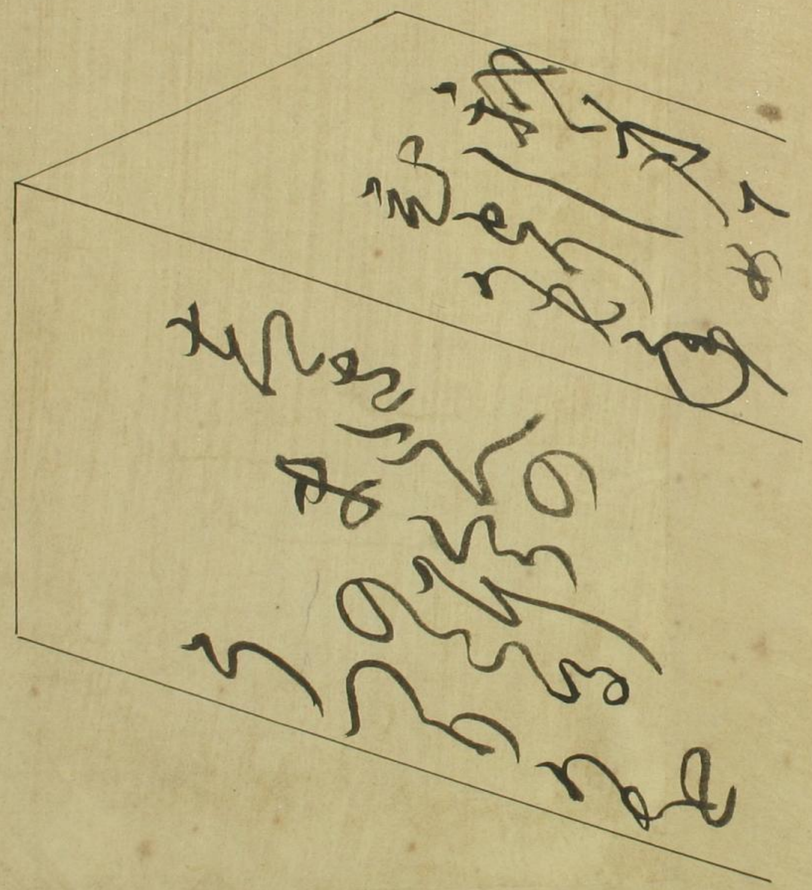
えびらがた盛衰記　市村座

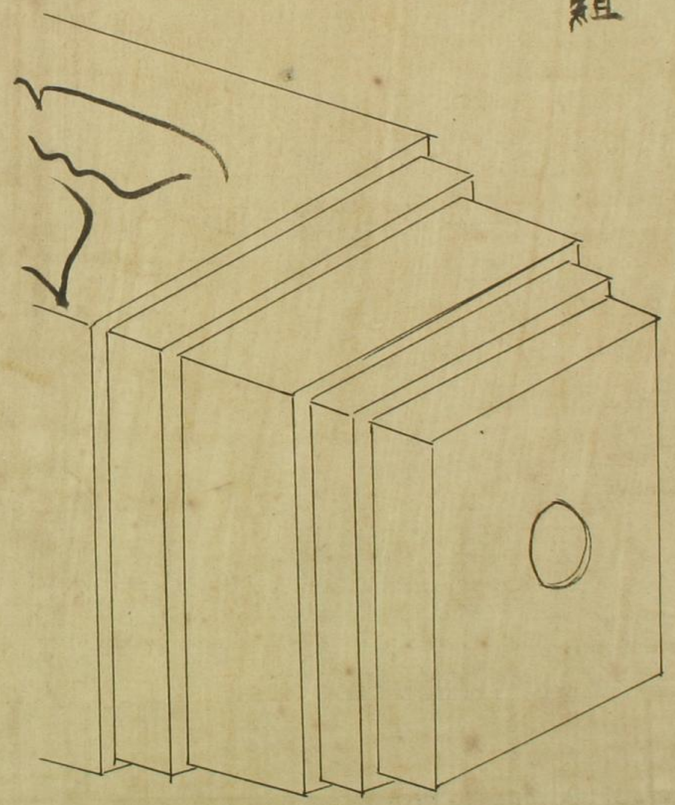
植木屋平兵衛
権四郎
おふく
梅ごく
志げ志
かち志源太
岡惣大評判大あたり

松本幸四郎
澤村長十郎
尾上梅幸
中村秀太郎
尾上菊五郎
市村羽左衛門

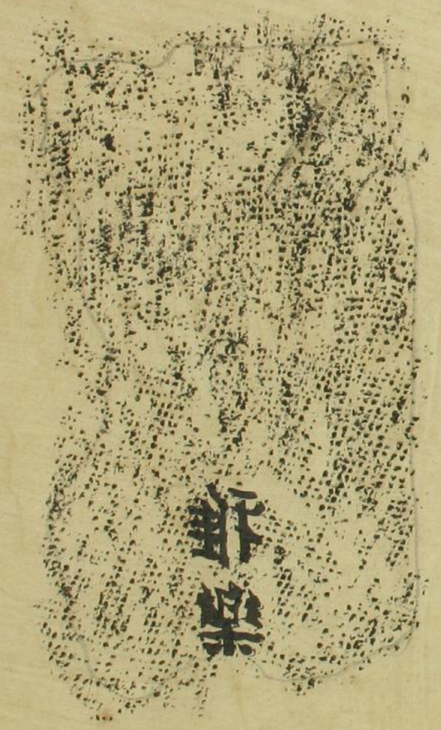
薄雲枕

五ツ組





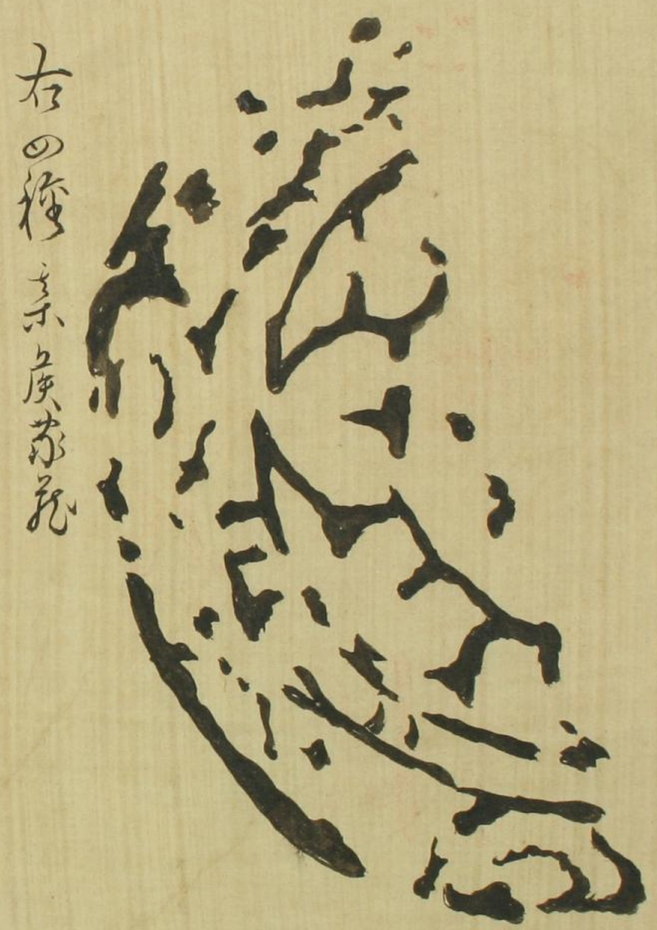
雅楽寮古尾



木工寮古瓦

勧学院古瓦

真言院古瓦



右の瓦 素庚茅元

御本丸大手

萬治二己亥年 八月吉日

御鑄物師

銅意法橋

同子

渡邊近江大掾

源正次

西丸大手 二重八慶長十九年 同掛直元茅土三年ヒあり

寛永元甲子年 八月吉日

椎名源左衛門尉

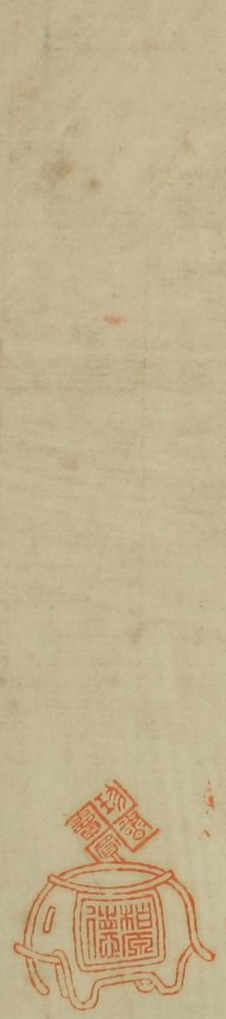
吉勝作

御大工

椎名兵庫頭

正徳元歳
六月吉日
浅草橋
御鑄物師
天部豊前重次

正徳元歳
卯
七月吉日
筋違橋
鑄物御大工
推名伊豫重

江戸中まわりしのある所橋絵ゑ十四ケ所橋の名と
年号とを拵て後世考ふ備ふ也ふ其三四を摹ル

おもき言ふ あまかつらふ